

アイルランド人の起源をめぐる諸研究と「ケルト」問題

田中 美穂

一般科文系

アイルランド人はいつ、どこからやって来たのであろうか。隣国のブリテンや遠く離れた東アジアの日本と同じく、アイルランドは島国である。アイルランド人の起源をめぐる、古今を問わず、さまざまな議論がされてきた。歴史学的には、過去の人々が、アイルランド人の起源についてどのように考えてきたのかを探ることも重要である。一方、現在に生きる私たちは、最新の研究では、どこまで明らかになっているのか、どのような見解が示されているのかについても知りたいと考える。

本稿では、とくに分子遺伝学者たちの研究に注目しつつ、アイルランド人の起源について考えていきたい。彼らがいわゆる「ケルト」についてどのように考えているのかについても明らかにしていく。

キーワード：アイルランド人、考古学、分子遺伝学、起源、「ケルト」

1. なかなか消えない「ケルト」神話

筆者はかつて『島のケルト』再考と題する論稿を発表した¹⁾。当時、一般レベルでは言うまでもなく、国内外のアカデミックな世界でも、おおむね「アイルランド人＝ケルト人」と位置づけられており、前近代のアイルランド人やアイルランドの歴史について、間違った認識がまかり通っていた状況を変えたいとの思いがあった。

従来の学説では、鉄器時代(約3000年前から紀元1世紀)に、中央ヨーロッパで栄えた文化(ハルシュタット文化、ラ・テーヌ文化と称される)の担い手である「ケルト人」が、ゲルマン人やローマ人に追われて紀元前7世紀頃からブリテン諸島に移住し、今度は紀元後にイングランドに侵入したアングロ・サクソン人に追われて、アイルランド、スコットランド、ウェールズなどに移住したことになっていた。これらの地域の人々は、「野蛮」だとか「ロマンティックな民」だとか様々に形容されつつ、一括りに「ケルト人」としてあつかわれてきた。このような「ケルト」観(「ケルト」神話と言ってもよいだろう)は、近代に、各地域のナショナリズムの高揚などの影響を受けて創造されたものである。しかし、その「ケルト」観が、歴史的事実として、前近代史において誤用されてきたのである。

上述の拙論では、中世初期アイルランドの諸研究における「ケルト」離れの動向と、鉄器時代ブリテンの考古学者たちのよりストレートな「ケルト」批判の言説を紹介した。拙論の発表と前後して、考古学、古代ローマ史、社会言語学を専門とする国内の研究者からも、このブリテンの考古学界の動向をあつかった研究が公にされた²⁾。

にもかかわらず、大衆向けの(非アカデミックな)書籍類や一般的な辞書・事典類、世界史の教科書の記述にいたるまで、相変わらず従来の「ケルト」論が展開されている。『ハリー・ポッター』シリーズに代表される魔法・ファンタジー文学の特集番組や解説書などでも、そのルーツとしてよく「ケルト」ないし「ケルト人」が取り上げられる。音楽の世界でも「ケルト・ミュージック」なるジャンルが創られて、もてはやされている。いまだに商業ベースでは「ケルト」という言葉が踊っている。経済効果があるからか、「ケルト」神話はなかなか消えないのである。

これらの「ケルト」問題をからめて、アイルランド人の起源をめぐる分子遺伝学者たちの最近の研究について、次に見ていきたい。

2. 分子遺伝学者たちの研究

現在では、先史時代の研究は、従来の考古学者のみならず、分子遺伝学者たちによって活発におこなわれている。彼らは、分子生物学者、文化人類学者、DNA考古学者などとも呼ばれている。歴史学は、基本的に史料が存在しないと成立しない学問であり、史料がない時代、あるいは、他者による史料は存在するが研究対象とする当事者による史料がない時代の研究は、考古学などの研究成果に負うところが大きい。アイルランド人の起源をたどろうと思えば、当然、先史時代の考古学研究を拠り所とすることになる。もちろん、これまでも先史時代のアイルランドの研究は、考古学だけではなく、言語学や民俗学などの他分野の研究成果と連携しておこなわれてきた。その結果、鉄器時

代の発掘物が無批判に「ケルト人」に結びつけられ、現在、ブリテン諸島の鉄器時代の考古学者たちから完全に否定されている上述の「ケルト」神話を生み出したという経緯もある。そのような状況で、近年、アイルランド人ないしブリテン諸島の人々のルーツをめぐる分子遺伝学者たちの研究が盛んにおこなわれているのである。本邦でも、DNAでたどる日本人の起源をめぐる研究が、考古学・文化人類学・遺伝分子学の領域で実践されている。

歴史学を専門とする筆者には、分子遺伝学は考古学以上に畑違いの分野である。専門用語にも不案内で、検証方法や研究成果の妥当性を判断できる立場にない。しかし、中世アイルランド史を研究する者として、アイルランド人の起源には強い興味がある。それゆえ、非力ながら分子遺伝学の研究者たちの見解を以下に紹介していきたい。

(1) ブライアン・サイクスの研究

最初に取り上げる分子遺伝学者サイクスの研究は、本稿に関連するものとしては2冊が邦訳されている³⁾。とくに『アダムの呪い』では、自身のサイクス家のルーツをたどったり、ヴァイキングや中世スコットランドのサマレッド一族のY染色体を調査したりして、それぞれの血統の起源や分布を明らかにしている。父系によってのみ伝わるY染色体のDNAや母系によってのみ伝わるミトコンドリアDNAの解析によって、サイクスは、世界各地の、またブリテン諸島各地の人々の祖先や移動経路を探究する。サイクスは、古代のヒトの骨からも遺伝子解析が可能であることを提唱したことで知られ、彼の著作では、各地のサイクス家の人々やサマレッドの末裔たちからDNAを提供してもらう様子や、各地の博物館や遺跡に眠る過去の人々のDNAを採取する様子が記される。

さらにサイクスは、ブリテン諸島の人々に対象をしばり、彼らの遺伝子のルーツを探求する研究を発表した。アメリカ版の題は『サクソン人、ヴァイキング、ケルト人：ブリテンとアイルランドの遺伝学的起源』であり、同じ内容のUK版の題は『(ブリテン) 諸島の血統：我々の種族の歴史の遺伝学的起源を探る』となっている。アメリカ版の題の方が、インパクトがある。どちらの版も2006年に出版され、翌年にペーパーバック版も刊行されている。本稿ではアメリカのペーパーバック版から引用する⁴⁾。

サイクスの研究は、一般向けに平明な文章で書かれている。「アイルランド人」「スコットランド人とピクト人」「ウェールズ人」「イングランド人とサクソン人・デーデン人・ヴァイキング・ノルマン人」に分けて、それぞれの歴史やDNAについて論じている。本文中に研究者や研究書の紹介はされるものの、注も文献リストもない。Y染色体に神話や伝説に登場する神々や英雄の名を付けている。たとえば、大多数のアイルランド人のY染色体は、一つの家系に属するものだとされるが、その一族は「オシーン」(3世紀の伝説上の英雄・詩人)と名付けられる。サイクスは、こ

の「オシーン」の一族がアイルランド各地域のY染色体に占める割合を出している。最も高いのが北西部のコナハトで98%、次に高いのが南西部のマンスターで95%、北東部のアルスターは81%、最も低いのが南東部のレンスターで73%となっている。レンスターで最も低かった理由について、サイクスは、「(12世紀後半以降の) アングロ・ノルマン人の侵略がこの地で始まった」ことを挙げる。さらに興味深いことにサイクスは、アイルランド人男性の圧倒的多数がもっている「オシーン」のY染色体が、スペインのバスク地方やガリシア地方の調査でも見られることを指摘し、「アイルランドとスペインの間には遺伝学的結びつきがある」と主張するのである⁵⁾。

サイクスの著作によると、「オシーン」のY染色体は、オークニー諸島とシェトランド諸島を除くスコットランドやウェールズでも多く見られ(スコットランド全体で72.9%、ウェールズ全体で83.2%、イングランド全体でさえ64%を占める)、その分布はアイルランドとブリテン島南西部(ウェールズとコーンウォール)に集中している⁶⁾。それゆえサイクスは、「オシーン」一族に代表されるスペインからブリテン諸島にかけての染色体を「大西洋型ハプロタイプ」(※「ハプロタイプ」とは「遺伝的構成ないしDNA配列」のこと)あるいは「大西洋染色体」と名付けるのである⁷⁾。

「オシーン」のY染色体の分布は有力な一例であるが、ミトコンドリアDNAの分布などそれ以外の現象も合わせて検討し、サイクスは、アイルランド人の起源に関して次のような結論を出している。彼は、「中央ヨーロッパからアイルランドやブリテン諸島への大規模な移住の証拠は何もない」と述べ、いわゆる「島のケルト人」と「大陸のケルト人」とは遺伝学的に見て無関係であると主張する。

彼によれば、「アイルランドのケルト人」の大部分は、農耕が始まった頃にイベリア半島から移住した人たちで、ブリテン諸島が切り離される前にヨーロッパ大陸から来ていた中石器時代(約1万1500年前～約6000年前)の人たちと一緒にいた。また、中世アイルランドの起源神話や、ブリテンの起源神話であるブルータス伝説でスペインが登場することにも言及し、ブリテン諸島とスペインとの遺伝学的に見た関係の深さを強調するのである⁸⁾。さらには、イングランド人にも彼が呼ぶところの「ケルト人」の先祖をもつ人が意外に多いことにも注目している。彼によれば、根本的にブリテン諸島の人々は、遺伝学的には「ケルト人」にルーツをもつのである⁹⁾。

(2) スティーヴン・オッペンハイマーの研究

次に、オッペンハイマーの研究を取り上げたい。彼の著作も邦訳(原題: *Out of Eden: The Peopling of the World*, 2003年。仲村明子訳『人類の足跡10万年全史』草思社, 2007年)があるが、ちょうど前述のサイクスの著作と同じ年に刊行された同じテーマの研究書とその後に発表された論

文の内容を検討していきたい¹⁰⁾。まず刊行本から取り上げるが、用語解説、注、文献リストが含まれる。図版だけではなく、地図や表も多く、研究書としても堅実なものとなっているようである。何よりも興味深いのは、結論の内容がサイクスのもとのさほど変わらないことである。

サイクスもそうであるが、オッペンハイマーも、「ケルト人」という言葉を使用する。しかし、後者はサイクス以上に「ケルト人」の定義や記述に慎重である。「ケルト人」という言葉は、本稿でそうしているように、たいていはかっこ(‘ ’)付きで記される。ただし、ケルト語については‘celtic languages’と‘c’が小文字になっており、なぜ小文字にするのかその必要性が分からなかった。「ケルト」は固有名詞であるので、「ゲルマン語」「ラテン語」がすべて大文字で始まっている通り、「ケルト語」についても大文字を使用すべきである。表記に不自然さを感じた(※論文の方では大文字になっていた)。

さて、肝心のアイルランド人の起源に関するオッペンハイマーの見解であるが、最近の研究状況について、「アイルランドへの(鉄器時代の)ケルト人移住の考えを今も受け入れている考古学者と歴史家を探すことは難しくなってきた」と述べ、「私の分析から鉄器時代に移住したという遺伝学的証拠はない」と言い切っている¹¹⁾。サイクスと同じく、彼も遺伝学的見地から、従来の「ケルト」移住説を否定する。そして、やはりスペインとの強い関係を指摘するのである。彼の分析によると、ブリテン諸島の人々の75~95%が遺伝学的にイベリア半島出身者と一致し、アイルランド、ウェールズの海岸側、スコットランドの中部と西岸はほとんどすべてイベリア半島出身者で構成される¹²⁾。オッペンハイマーは、ブリテン諸島の先祖の4分の3は、最初の農民が現れるはるか昔にこの地に到着していたとし、比率としては、全体で72.6%、アイルランドでは87.9%、ウェールズでは81.1%、コーンウォールでは78.8%、(付随する島々を含む)スコットランドでは70.1%、イングランドでは67.7%という数字を出している¹³⁾。

彼は、従来の「ケルト」観を批判・否定した鉄器時代の考古学者たちに対して疑問を呈し、「ケルト人のエスニティーは現在も古代も有効な概念である」という見解を示す。‘Celtic’という用語が崩壊したことに対しては同意するが、それは「一民族としての「ケルト人」が、鉄器時代に中央ヨーロッパのどこかから西ヨーロッパを越えてブリテン諸島に掃かれたという考古学上の学説の拒否にほかならない」という¹⁴⁾。しかし、一方で、「現在のアイルランド人の祖先は男女とも、ケルト語の到達よりも何千年も前に来た」と述べ¹⁵⁾、アイルランドの先住民の間でどのようにケルト語が広まったのかについて納得のいく説明はされていない。

ここで、オッペンハイマーのより最近の論文について見ていく。彼は二つの問いを投げかけている。一つ目は、「ケルト人」はブリテン諸島の先住民であったか、というもの

で、二つ目は、アングロ・サクソン人は、「ケルト人」のジェノサイドをおこなったのか、という問いである¹⁶⁾。これらに対する結論は、先に紹介した彼自身の著書(2006年)の内容とほとんど変わらない。この論文は、「西からのケルト化」をテーマとする研究大会での発表をもとに構成されているので、やはりアイルランドとイベリア半島との関係性が強調されている。また二つ目の問いに関しては、すでに著書の方で、「(アングロ・サクソン人の)ジェノサイドの証拠はほとんどないが教科書には(その記述が)残る」とジェノサイドの可能性をはっきりと否定している¹⁷⁾。ちなみに彼は、「ケルト人」同様、「アングロ・サクソン人」の実態についてもさまざまな解釈がなされており、その定義付けが難しいことにも随所で言及している。

一つ目の問いに関しても、否定的な結論となっている。オッペンハイマーは、遺伝子はエスニックのラベルも言語のラベルも運んでくれないし、「ケルト人」が誰で、いつ、どこから来たのかという一致した見解もないので、答えることは不可能だとしている。しかし、彼は、「ケルト人」が最初の農民よりも先にブリテン諸島に到着したわけではなかったことが統一見解だとすると、「ケルト人」は10%に満たない少数派であっただろうという。そして、言語だけが真の先住民の言語に取って替わったのであって、結局のところ、アイルランドとブリテンの大西洋側において、「ケルト人」の子孫には先住民と呼べるだけの資格はないだろうと推測する¹⁸⁾。そして、ブリテン諸島のミトコンドリアDNAとY染色体のハプログループ(※「ハプログループ」とは「系統樹の枝の部分であり、類似性をもつハプロタイプの集団」)の解析結果から、イベリア半島北部の氷河を逃れて、新石器時代(約6000年前~約4000年前、農耕が始まる時期)より前に大西洋側に沿ってブリテンとアイルランドに入植した人たちが、1950年代以前の住民の祖先の大半である、と結論づける¹⁹⁾。

以上、サイクスと異なり、オッペンハイマーの研究、とくに論文の方では、「ケルト」についてかなり慎重に議論が進められている。そして、「ケルト人」がブリテン諸島の人々の先住民ではないことを明らかにしている。

(3) マケヴォイとブラッドリーの研究

もう1点、上述の研究大会に由来する論文を紹介したい。こちらでもアイルランド人と「ケルト人」について論じている。ヨーロッパ中の遺伝子を分析した結果、アイルランドの場合は、ヨーロッパ大陸の東よりも南と結びつくことが示されるという。加えて、ゲノムのレベルでは、アイルランド人は中央ヨーロッパの人々との特別に近い類似性はないと断言している。やはりここでも、中央ヨーロッパのいわゆる「ケルト人」の中心地から鉄器時代に大量の移住があったとする従来説が否定されている²⁰⁾。

さらに彼らは、ゲール語(※ケルト語の一つとされるアイルランドの言語)のアイルランド人の名字は、紀元1000

年頃のアイランドの父系社会の性質を反映しているという。アイランドでは中世初期から豊富な系図が残されているが、彼らは、中世初期から北部を中心に優勢であったイー・ネール一族の名字の分布とY染色体の分布を解析し、両者の歴史的軌跡が共通して「遺伝子が言語と結びつくと言えるだけの一つの例が提示される」と結論づける。彼らによれば、アイランドでは1000年間もそれが持続されていたのである。サイクスもまた、アイランドでは、イー・ネールの名字をもつ男性の比率が高いこと、とくに北西部では、イー・ネールとの結びつきが強く、Y染色体の比率も男性の4分の1に達すると論じている²¹⁾。

以上、分子遺伝学者たちの研究を見てきたが、それぞれが、それぞれの研究結果から、鉄器時代における中央ヨーロッパからブリテン諸島への「ケルト人」の移動説を否定している。アイランド人の大半の祖先が来た時期については、上述のように、サイクスは「農耕が始まった頃」、オッペンハイマーは「新石器時代より前」としている。これらの中石器時代ないし新石器時代にアイランドに来た人たちを、サイクスは「ケルト人」としているが、サイクスは「アイランド人＝ケルト人」という従来の枠組みを無批判に使用しているだけであるので論外である。一方のオッペンハイマーはより慎重で、アイランド人の祖先を「ケルト人」と同一視していない。

3. アイランド人のルーツはスペインに？

おもな分子遺伝学者たちの研究に目を通すと、アイランド人のルーツをスペインに置く点で一致する。そして、彼らは決まって、11世紀後半にアイランドで編纂された起源伝説『アイランド来寇の書 (*Lebor Gabála Éirenn*)』²²⁾を持ち出すのである。

この起源伝説については前に別稿で取り上げたので²³⁾、本稿では詳細は省略するが、作者不詳で、当時のアイランドの知識人によって創造された壮大なアイランド人の起源伝説であり、歴史物語である。物語は『旧約聖書』の天地創造から始まり、アイランドへ来寇した人々が順に叙述されていくが、最後にアイランドに来寇したとされるのが、「スペインのミール (*Míl Espáinne*)」である。このことは、遅くともこの頃までに、知識人たちのあいだで自分たちの祖先を「スペイン出身者」と見なす統一見解があったことを意味する。

サイクス、オッペンハイマー、マケヴォイとブラッドリーの研究では、各々のDNA解析の研究から、アイランド人のルーツとして南ヨーロッパ、とくにスペインが導き出されたことについて論じる際、いつも『アイランド来寇の書』が引合いに出される²⁴⁾。ただ引合いに出されるだけで、とくに説明はないのであるが、それだけで、まるでアイランド人のルーツがスペインにあることが真実で

あり、中世の知識人たちにそのことが何千年も前から伝えられてきたかのような印象を読者に与えてしまう。

分子遺伝学者たちの新たな学説、とくにアイランド人ないしブリテン諸島の人々のルーツをスペインに設定する学説は、他分野の研究者たちによってどのように受け取られているのだろうか。まず、検討されるべきは、ブリテン諸島の考古学者たちや言語学者たちの反応であるといえるだろうが、彼らは分子遺伝学者たちの学説をどのようにとらえているのだろうか。

それを知る手掛かりは、オッペンハイマーの論文もそこに収録されているのであるが、上述の研究大会をもとに編まれた論文集にある。この論文集の編者であるバリー・カンリフは「ケルト」を専門とする考古学の権威であり、もう一人のジョン・T・コッホは古代のケルト諸語を専門とする研究者である。両者とも従来の伝統的な「ケルト」観を継承する研究者であった。彼らにとっては「ケルト」という枠組みは今なお有効で、決してその看板が外されることはない。しかしながら、考古学界のみならず、分子遺伝学者たちによっても、ブリテン諸島への鉄器時代の「ケルト人」移住説が否定された今、彼らの研究も修正され、新たな学説が提示されるようになった。

上記の論文集に収録されているカンリフとコッホの研究については、ケルト語圏を専門とする社会言語学者の原氏によって、すでに紹介されている²⁵⁾。詳細な解説はそちらに譲るとして、本稿では要点だけ述べたい。

カンリフは、ケルト語は紀元前5000年から紀元前3000年の間にイベリア半島の大西洋岸地域で発展し始めたのではないかと推察する。また、この地域の青銅器時代(紀元前1300年頃～紀元前800年頃)にはケルト語が大西洋岸地域の共通語(*lingua franca*)として確立していたが、紀元前500年頃以降、ブリテン諸島とフランス北西部との交易が途絶えるにしたがってケルト語が分化し、各地のケルト諸語が形成されたのではないかと仮説を立てている²⁶⁾。

一方のコッホは、スペイン南部アンダルシア地方のグダルキビール川河口にあったとされるタルテッソスという王国(紀元前8世紀が最盛期と見られる)で使用されていたタルテッソス語がケルト語であると提唱する。これが正しいとすると、カンリフの仮説と合わせて、ケルト語の中心としてイベリア半島を含む大西洋岸地域が浮かび上がり、その言語や文化がブリテン諸島に伝わったという流れが見えてくる²⁷⁾。もっとも現段階では、カンリフやコッホの上記の仮説が広く受け入れられているわけではなく、これが定説となる保証もない。

現時点で確認できることは、以下のことであろう。第一に、もはや鉄器時代に中央ヨーロッパからブリテン諸島に「ケルト人」が移住したという通説は、アカデミックな世界では通用しないということ。このことは10年前よりもさらに確実となった。第二に、さまざまな分野の諸研究から、ブリテン諸島の人々、とくにアイランド人のルーツがス

ペインにあることが指摘されている。しかし、このスペイン出身者たちは、オープンハイマーによれば「ケルト人」とは異なる人々であり、仮に「ケルト人」がいたとして、彼らがいつアイルランドに来たのかについて研究者間に共通の結論は出ていない。最後に、「ケルト」の看板を下ろすことができないカンリフやコッホのような研究者たちは、新たな学説(=スペイン起源説)に適合した新たなヨーロッパ全体の「ケルト人」移住説やケルト語分布説を生み出そうと格闘している、といったところであろうか。

4. アイルランド人研究者の見解は？

重要なのは、これらの問題について、本場のアイルランドの研究者がどのように考えているかということであろう。タイミング良く、考古学と言語学の両分野の権威 J・P・マロリーが、2013年に『アイルランド人の起源』という大著を刊行した。学生時代からこのテーマに興味があったというマロリーの見解を以下、見ていきたい²⁸⁾。

アイルランド島が今日の形や大きさになったのは、1万2千年前から1万年前であったと考えるマロリーは、アイルランドはユーラシアで最も人の定住が遅かった地の一つであり、紀元前9千年期後半か紀元前8千年紀初めまで入植されなかったという。また、アイルランドの最初の入植者の故郷と考えられるのは、スコットランド、マン島、ウェールズであるともいう²⁹⁾。また、アイルランドとブリテンが非常に強い類似性をもつことを指摘し、新石器時代のアイルランドの多くの起源がブリテンにあるという。さらにアイルランドは、新石器時代から青銅器時代にかけても、ブリテンだけではなく、大陸の大西洋岸地域とも親密な交流があったという³⁰⁾。

鉄器時代については、「外国からの侵入によってアイルランドの鉄器時代がもたらされたという説得力のある証拠はない」と、やはり従来説をきっぱりと否定している³¹⁾。『アイルランド来寇の書』についても、マロリーは言語学者や文献学者によって蓄積されてきた同書に関する研究をたどった上で、「アイルランドの起源をイベリア半島と結びつけることに対して、現地のアイルランド人側の信頼に足る証拠はない」という³²⁾。サイクスやオープンハイマーら分子遺伝学者たちは、同書のテキスト研究の蓄積を無視して、安易に、まるで中世の人々が先史時代のことを覚えているかのように『来寇の書』を持ち出すのであるが、アイルランド人の「スペイン起源説」は中世アイルランドの学者たちによって、古典研究にもとづいて創造されたものであり、決して「記憶」によるものではない、ということのマロリーは主張しているようである。

最近の分子遺伝学研究に対してマロリーはどのように考えているのであろうか。彼は、地理的に見て、ほとんどのアイルランド人の遺伝子はフランス南部かイベリア半島北部と結びつくようだといひ、「アイルランド人の遺伝

子調査のほとんどが、新石器時代より後の移住の重要な証拠を見つけることに失敗したのだ」と冷やかな調子で論じている。さらに、分子遺伝学の研究成果の不確実性も指摘し、「それが信頼に足ることが分かるまでは様子を見た方がよい」というスタンスである³³⁾。

最後に、マロリーの「ケルト人」に対する考え方を確認しておきたい。マロリーは、「大衆向きのアイルランド史の始めの部分ではいつも、紀元前500年から紀元前300年頃にアイルランド語(※この場合、「ゲール語」とほぼ同義)をもたらしたケルト人あるいはゲール人についての言及がある。最近の著作では、考古学者たちの容赦ない批判が影響を与えたことを示しているものもある」と述べている。日本だけではなく、本場でも「ケルト」神話はなかなか消えてくれないようである。マロリー自身、言語について取り上げる章まで、「ケルト」という言葉の使用を避けている。言語の名称に限定して「ケルト」という言葉を用いているのである。また、アイルランド語がアイルランドに導入された最も可能性の高い時期として、紀元前1千年頃から紀元前1世紀の間を挙げる³⁴⁾。

おわりに

本稿では、アイルランド人の起源をめぐる諸研究について紹介してきた。遺伝学的研究では、アイルランド人のルーツがスペインにあるらしいことがわかった。

アイルランド人のルーツに関しては、どうしても「ケルト」問題がからんでくるので、「ケルト」についても随時言及してきた。本稿では、おもに先史時代を対象としたが、「ケルト」とは実は現代の問題でもある。アイルランド、スコットランド、ウェールズ、コーンウォール、ブルターニュなどは、本来、非英語圏・非フランス語圏であり、イングランドないしブリテンやフランスといった大国に支配されてきた歴史をもつ。当然、彼ら固有の文化も言語も否定されてきた。それゆえ、言語や文化の復興・振興の名のもとにこれらの地域が集い、その際、「ケルト」という看板が付けられるという事情もある³⁵⁾。こういった地域を束ねるためには、どうしても「ケルト」という冠が必要になるのであろうか。しかし、「ケルト」に関しては、本稿で、諸研究を引用してくり返し論じてきたように、従来の学説が崩壊し、先史時代においては何をもって「ケルト」といってよいのか分からないような状況である。

「ケルト」という言葉が持つ諸問題や「近代の創造物」としての「ケルト」については、サイモン・ジェイムズやジョン・コリスらが明らかにしている³⁶⁾。不用意に「ケルト」という言葉を使いたがるのは、どちらかというと、当事者であるはずのケルト語圏の人々よりも、むしろ非ケルト語圏の人々である。「ケルト」とは部外者が使いたがる言葉のような気がしてならない。現在、前近代において、「ケルト」という言葉がどうにか使用できるのは言語学の

分野においてのみであろう。インド・ヨーロッパ語族のなかの「ケルト語派」として分類されているからである。

いずれにせよ、「ケルト」については、「」付きで記す、ないし「ケルト語」のような固有名詞以外では使わない、そういった配慮が必要であろう。

- 1) 田中美穂『島のケルト』再考『史学雑誌』第111編第10号, 2002年, 56-78頁.
- 2) 新納泉『鉄器時代のブリテン』岡山大学文学部研究叢書17, 1999年; 南川高志『海のかなたのローマ帝国 古代ローマとブリテン島』岩波書店, 2003年; 原聖『<民族起源>の精神史 ブルターニュとフランス近代』岩波書店, 2003年.
- 3) ブライアン・サイクス/大野晶子訳『イヴの七人の娘たち』ソニー・マガジズ/ヴィレッジブックス, 2001年; サイクス/大野晶子訳『アダムの呪い』ソニー・マガジズ/ヴィレッジブックス, 2004年.
- 4) Sykes, Bryan, *Saxons, Vikings and Celts: The genetic roots of Britain and Ireland* (New York: W. W. Norton & Company), 2006; paperback edition, 2007; *Blood of the Isles: Exploring the genetic roots of our tribal history* (London: Corgi Books), 2006; paperback edition, 2007.
- 5) Sykes, *Saxons, Vikings and Celts*, pp. 159-164.
- 6) Ibid., pp. 217-218, 239-240, 275, 290, 292.
- 7) Ibid., pp. 162, 239, 283.
- 8) Ibid., pp. 280-284.
- 9) Ibid., pp. 285-288.
- 10) Oppenheimer, Stephen, *The Origins of the British: The new prehistory of Britain and Ireland from Ice-Age hunter gatherers to the Vikings as revealed by DNA analysis* (London: Robinson), 2006, paperback edition, 2007; A reanalysis of multiple prehistoric immigrations to Britain and Ireland aimed at identifying the Celtic contributions. In B. Cunliffe and J. T. Koch (eds.), *Celtic from the West: Alternative perspectives from archaeology, genetics, language and literature* (Oxford: Oxbow Books), 2010; paperback edition, 2012.
- 11) Oppenheimer, *The Origins of the British*, p. 280.
- 12) Ibid., pp. 434-437.
- 13) Ibid., pp. 470, 573 (「エピローグ」の注2) .
- 14) Ibid., pp. 26, 471-473.
- 15) Ibid., p. 475.
- 16) Oppenheimer, A reanalysis of multiple prehistoric immigrations, p. 130.
- 17) Oppenheimer, *The Origins of the British*, pp. 477-478.
- 18) Oppenheimer, A reanalysis of multiple prehistoric immigrations, pp. 144-146.
- 19) Ibid., p. 144.
- 20) McEvoy, Brian P. & Bradley, Daniel G., Irish genetics and Celts. In Cunliffe and Koch (eds.), *Celtic from the West*, pp. 108-111.
- 21) Ibid., pp. 114-117; Sykes, *Saxons, Vikings and Celts*, pp. 215, 284.
- 22) Macalister, R. A. S.(ed. & trans.), *Lebor Gabála Érenn: The Book of the Taking of Ireland*, 5 vols. (London: Irish Texts Society), 1938-1956; rep. 1993-1995.
- 23) 田中美穂「中世アイルランドにおける『ネイション』意識」(法政大学比較経済研究所/後藤浩子編『アイルランドの経験——植民・ナショナリズム・国際統合』法政大学出版局, 2009年), 15-16, 23, 25-26 (注の30~33) 頁.
- 24) Sykes, *Saxons, Vikings and Celts*, pp. 129-132; Oppenheimer, *The Origins of the British*, pp. 87, 100-101; A reanalysis of multiple prehistoric immigrations, p.130; McEvoy & Bradley, Irish genetics and Celts, p. 110.
- 25) Cunliffe, B., Celticization from the West: The contribution of archaeology. In Cunliffe and Koch (eds.), *Celtic from the West*, pp. 13-38; Koch, John T., Paradigm Shift? Interpreting Tartessian as Celtic. In *ibid.*, pp. 185-301; 原聖「ケルト諸語文化の復興, その文化的多様性の意義を探る」(原聖編『ケルト諸語文化の復興』女子美術大学, 2012年), 9-23頁. ※同書は, 原聖編『ケルト諸語文化の復興 (『ことばと社会』別冊4)』(三元社, 2012年)として刊行された.
- 26) Cunliffe, *op.cit.*, pp. 22-25, 33-35; 原, 前掲書, 17-19頁.
- 27) Koch, *op.cit.*, pp. 292-295; 原, 前掲書, 13-15頁.
- 28) Mallory, J. P., *The Origins of the Irish* (London: Thames & Hudson), 2013, p. 6.
- 29) Ibid., pp. 36, 70.
- 30) Ibid., pp. 103-104, 128, 156.
- 31) Ibid., p. 199.
- 32) Ibid., pp. 201-214.
- 33) Ibid., p. 242.
- 34) Ibid., pp. 243-244, 286.
- 35) 最近の例として, 原聖編『ケルト諸語文化の復興』; 梁川英俊(責任編集)『辺境』の文化力: ケルトに学ぶ地域文化振興』(三元社, 2011年).
- 36) James, Simon, *The Atlantic Celts: Ancient people or modern invention?* (London: British Museum Press), 1999; Collis, John, *The Celts: Origins, Myths, Inventions* (Stroud, Tempus), 2003.

(2014.9.30 受付)